

香川県三豊市（国内5例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る
疫学調査チームの現地調査概要（令和2年11月15日実施）

令和2年11月15日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 農場の周辺環境

- ① 当該農場は、1例目の農場から約1.5km、3例目の農場から約2.5km、4例目の農場から約2.3km離れた、丘陵地の中腹に位置している。西側は別の養鶏場に接し、付近は雑木林に囲まれている。また、農場敷地の周囲に複数のため池があり、近いものでは鶏舎から約200mの距離に1つ、約300mの距離に1つ、約500mの距離に1つあるが、現地調査時に水鳥類は確認できなかった。なお、当該農場から約1.8km離れた位置に、1例目の調査時に多数の水鳥類を確認した長径約500mの池がある。
- ② 当該農場には3棟の2階建てウィンドレス鶏舎があり、発生時、いずれの鶏舎においても採卵鶏が飼養されていた。GPセンターは併設されていなかった。当該農場の鶏舎はすべて1階2階ともに同一の構造であり、発生鶏舎は1階部分であった。

2 通報までの経緯

- ① 国内1例目（11月5日）及び国内3例目（11月11日）の発生に伴い実施した周辺農場検査において、陰性が確認されていた。
- ② 管理人によると、発生鶏舎では1日あたりの死亡鶏は0~5羽程度で推移していたが、11月14日の朝に22羽の死亡が確認されたことから、家畜保健衛生所に通報したとのこと。
- ③ 管理人によると、通報時の死亡鶏は、発生鶏舎のほぼ中央付近のケージに限局しており、同じケージでは生存している鶏もうずくまって活力がなかったが、それ以外では異常が認められなかった。

3 管理人及び従業員

- ① 当該農場の鶏舎の管理は、堆肥担当を除く3名の専属の従業員によって行われているが、そのうち1名は卵の管理のみを担当していた。なお、堆肥を担当していた従業員は、当該農場と隣接農場の計2農場の堆肥を管理していたが、当該農場の鶏舎に入ることはなかった。
- ② 従業員が休む際には、系列の本社から人員が1人派遣されていた。なお、当該農場への派遣者は毎回同一人物であった。
- ③ 管理人によると、従業員は毎日、鶏舎において鶏の健康観察を行うとともに、死亡鶏を回収して、当該農場専用の焼却炉で焼却処分していた。
- ④ 管理人によると、従業員は農場専用の作業着と長靴を使用しており、鶏舎に入る際には作業着を交換し、手指消毒と踏み込み消毒槽を実施していたが、長靴は交換していなかった。

4 農場の飼養衛生管理

- ① 鶏舎横には飼料タンクが設置されているが、当該タンク上部には蓋が設置されており、タンク内への野鳥等の侵入やタンク内の飼料への野鳥の糞等の混入の可能性は低いと考えられた。
- ② 飼養鶏への給与水は、水道水がいったん農場内の貯水タンクに貯蔵されパイプによって各鶏舎に供給されている。
- ③ 鶏糞は除糞ベルトで1階の開口部より毎日鶏舎外へ搬出され、農場内の鶏糞処理設備で堆肥化されている。なお、鶏糞処理設備には防鳥ネットは設置されていなかった。
- ④ 管理人によると、鶏舎ごとにオールイン・オールアウトを行っており、オールアウ

トのたびに鶏舎内の清掃・消毒を行っているとのことであった。

- ⑤ 管理人によると、車両が当該農場に出入りする際は、動力噴霧器による消毒を行っているとのことであった。
- ⑥ 鶏舎構造は鶏舎奥の壁面に設置された換気扇から排気し、反対側壁面と鶏舎側面に設置されたフィルターから入気するタイプの鶏舎であった。換気扇の外側には開閉可能な遮蔽板が設置されており、換気扇が停止する際にはこの板が閉鎖する。

5 野鳥・野生動物対策

- ① 発生鶏舎には、鶏舎から集卵コンベアが外へ出る開口部に隙間があり、小型の野生動物が侵入可能と考えられた。発生鶏舎の2階部分の天井や壁等には、隙間やネズミによるものと思われる齧り痕が多数認められ、小型の野生動物が侵入可能であった。また、鶏舎内の1階と2階をつなぐ除糞ベルトの開口部には隙間がみられた。
- ② 管理人によると、鶏舎内においてネズミを見かけることがあるが、不定期にネズミ対策（殺鼠剤散布）を行っているとのこと。現地調査時には、鶏舎内にネズミのものと思われる小動物の糞が認められた。
- ③ 管理人によると、農場内でカラスやスズメ等を見かけることはあったが、鶏舎内において野鳥を見かけたことはないとのこと。現地調査時には農場内ではハシブトガラス 20羽程度を確認した。